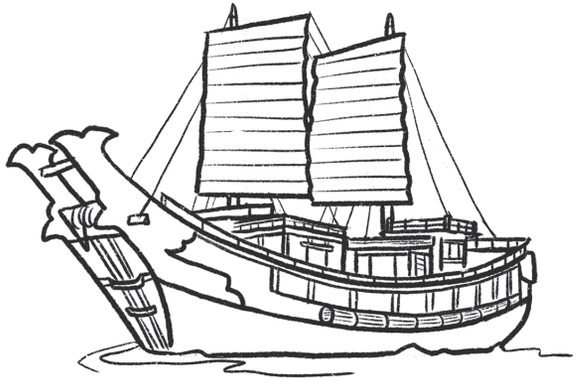
飛鳥時代

流れをザっとおさらい

593 年	**聖徳太子**が推古天皇の摂政になる
603 年	冠位十二階の制
604 年	十七条の憲法
607 年	法隆寺の建立／遣隋使の派遣
618 年	隋が滅亡して唐が成立
630 年	遣唐使の派遣
643 年	山背大兄王が蘇我入鹿に攻撃され自殺
645 年	**乙巳の変**で蘇我氏滅亡／**大化の改新**始まる
660 年	唐・新羅連合軍が高句麗・百済を攻撃
661 年	斉明天皇が崩御
663 年	**白村江の戦い**
668 年	天智天皇が即位
669 年	臨終に際し、中臣鎌足が藤原姓を賜る
672 年	**壬申の乱**
673 年	**天武天皇**が即位
701 年	大宝律令



593 年に聖徳太子（厩戸皇子）が推古天皇の摂政になると、冠位十二階の制、十七条の憲法、法隆寺の建立と次々と改革を行っていきました。特に外交では遣隋使として小野妹子を派遣し、隋と対等な関係を築くことに成功します。この関係は唐の時代になっても受け継がれていきました。

聖徳太子の時代に繁栄した蘇我氏は、聖徳太子の死後、蘇我入鹿が山背大兄王を殺害したため、中大兄皇子と中臣鎌足が手を組み、滅亡させられました（大化の改新の始まり）。663 年、白村江の戦いに出兵したものの敗退。その後、中大兄皇子は天智天皇となり、日本を唐のように強い国にするべく、律令国家の基礎を築きました。中臣鎌足は臨終に際して藤原姓を賜り藤原鎌足となり、後に繁栄する藤原氏の祖となりました。

天智天皇の死後は壬申の乱が起こり、大海人皇子が勝利し、即位して天武天皇になりました。天武天皇は古事記や日本書紀の作成を指示し、後の大宝律令につながる律令国家の強化を行っていきます。

教科書では一見バラバラに見える時代ですが、少し深掘りしてみると、**それぞれがちゃんと関連している**ことがわかります。歴史は**流れを意識**すると、何が起きたのか、どうしてそうなったのかが見えてきます。

飛鳥時代
歴史の舞台を確認！

推古天皇の時代から持統天皇が藤原京へ遷都するまで都となっていた場所を飛鳥と呼び、現在は奈良県高市郡明日香村となっています。この飛鳥を中心に栄えた時代を飛鳥時代と言い、壁画で有名なキトラ古墳や高松塚古墳も飛鳥にあります。

朝廷の勢力範囲は、南は鹿児島から、北は福島、新潟辺りまで及んでいたと考えられています。飛鳥はちょうどこの中央に位置し、遣隋使は瀬戸内海、福岡（大宰府）、対馬を通って、朝鮮へと渡っています。この**大宰府**と対馬を利用したルートは、江戸時代でも用いられた重要なルートの一つとなっており、

大宰府は**外交や貿易の役割**を担うようになりました。また、白村江の戦いで負けてからは、**中国、朝鮮からの侵略を防ぐ防衛拠点**となっていきました。

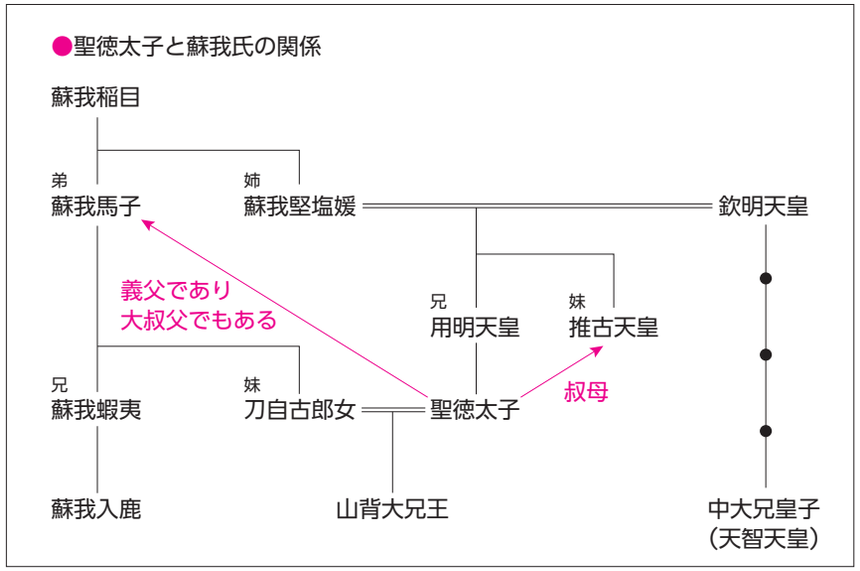
聖徳太子の政策

聖徳太子は蘇我氏と親戚!?

6世紀末に**聖徳太子**が誕生し、593年に**推古天皇**の摂政になります。聖徳太子は昭和時代にお札の肖像画（右図）にも用いられており、1984年に福沢諭吉へ変わるまで使われていたため、今の親世代、祖父母世代の中には懐かしいと感じる人もいるでしょう。何人もの話を同時に聞き分けたという逸話をはじめとする様々な伝説が今日まで伝わっていますが、この聖徳太子という名前は死後につけられた尊称で、本名は**厩戸皇子**と言います。以前の教科書では聖徳太子と記載されていましたが、現在の教科書では併記、もしくは厩戸皇子と書くようになりました。

聖徳太子

さて、教科書では聖徳太子の名前が登場したら、すぐに推古天皇の摂政となった話、遣隋使や政治の話になりますが、実は**大化の改新でお馴染みの蘇我氏ともこの時点で関わりがあります**。推古天皇は聖徳太子の叔母（父の妹）にあたり、その推古天皇の母は**蘇我稲目**の娘です。つまり聖徳太子、推古天皇、蘇我氏は血縁関係にあるのです。そして蘇我稲目の子には蘇我馬子がいて、後に滅ぼされる**蘇我蝦夷**、**入鹿**と続いていきます。豪族だった蘇我氏は、このよう



に娘を天皇に嫁がせることで勢力を拡大していったのです。

ところがこの蘇我氏と天皇との関係は、**蘇我入鹿が聖徳太子の子である山背大兄王を攻撃して自殺させる**ことで急変します。実は聖徳太子自身も蘇我馬子の娘（刀自古郎女）と結婚しているため、山背大兄王は入鹿にとっていとこ（父の妹の子）だったのです。そんな親族をも殺害する傍若無人な入鹿を天皇家は問題視し、**中臣鎌足**と**中大兄皇子**が手を結んで**蘇我入鹿を殺害**します。これを**乙巳の変**と言います。ここから２人の政治改革、いわゆる**大化の改新**が始まっていくことになるのです。

さてここで突然出てくる中臣鎌足は、後に繁栄する藤原家の祖、**藤原鎌足**となりますが、どのようにして頭角を現してきたのでしょうか。実は聖徳太子が行った政策が関係してくるのです。

なぜ冠位十二階の制と十七条の憲法は重要なのか

聖徳太子は 607 年に**小野妹子**を**遣隋使**として派遣した、と教科書には載っていますが、実はこれは**２回目の派遣**で、600 年にも一度派遣しているのです。それ以前に中国の王朝と交流したのは 100 年以上前のことだったため、倭（現在の日本）の様子について記したものを隋に送り、今後の関係を期待したのですが、隋には相手にされませんでした。これを恥だと思ったためか、この１回目の遣隋使については日本の歴史書には記録が残っていないのです。そのため、教科書には２回目という中途半端なところから小野妹子が登場してくることになります。

さて、この１回目の遣隋使の派遣が空振りだったことから、聖徳太子は「日本をもっとしっかりしたルールで作られた国にしないといけない」と考えました。そこで考え出されたのが、**冠位十二階の制**です。冠の色で地位を表し、優秀な人材は血縁にかかわらず登用するという制度ですね。この制度により**優秀な人材として認められた**のが、２回目の遣隋使となる**小野妹子**、そして後に大化の改新を行う**中臣鎌足**なのです。聖徳太子は、力が全てだった豪族の時代に、次の時代のリーダーとなりうる人材を発掘するシステムを作り上げることに成功したのですね。

世界最古の王朝を作り上げた和の精神

優秀な人材を見つけることができる制度は整いましたが、国のルールが決まっていません。せっかく優秀な人材が集まっても、ルールがない場所ではそれも活かされません。そこで作られたのが**十七条の憲法**です。憲法というと法律のような感じがしますが、この十七条の憲法は**役人の心構えを記したもの**です。例えば、「和を貴び、人に逆らい背くことのないように心がけよ」、「真心を持つこと」、「失敗を怒るな」、「嫉妬心を持つな」、「みんなとよく話し合って決めなさい」というようなことが書かれています。つまり争いは喧嘩や暴力ではなく、話し合いで仲良く解決しなさい、と定められていたのです。なぜこのようなことを入れたのでしょうか。それは冠位十二階の制で登用した人には豪族出身の人が多かったためです。「豪族」は古墳時代までに力の強い者が国を治める世界で形成されました。そんな人たちを登用したらどうなってしまうで

しょうか。下手をすれば天皇家が力で潰されてしまうかもしれません。そこで聖徳太子は、ルールがないこの時代に、ルールの導入から入るのではなく、**ルールを守るために必要な道徳、心構えから入った**のです。これがなかったら、後の大宝律令で中国のルールを真似して決めたところで、守られずに破綻していたかもしれません。

さらに十七条の憲法にはもう一つその後の国づくりに関わる重要な内容があります。それが「**天皇の詔**（みことのり）を受けたら、**必ず謹（つつし）んでこれに従え**」というものです。天皇は地方の豪族を束ねている絶対的な存在ではあったものの、強いというウワサがあるから皆が従っていただけだったのです。つまり、天皇家を滅ぼしてしまえばそれでおしまい、という可能性もあったということです。それをルールとして「天皇をトップとして倭という国は成り立っている」と定めたことで、天皇を中心とする国家を作り上げることに成功し、これが日本という国が 1400 年以上続く基礎になったわけです。そのような大切な一文が、17 条ある中の最初でも最後でもなく、3 番目にさらりと入れてあるあたりも、興味深いですね。

遣隋使

なぜ煬帝は 3 回目の遣隋使を受け入れたのか？

607 年に小野妹子を使者として**遣隋使**を派遣しました。この時、聖徳太子が持たせた国書、「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す」（日が昇る東の国のリーダーから、日が沈む西の国のリーダーへ）で**隋の皇帝、煬帝（ようだい）を怒らせた**のは有名な話ですね。これは聖徳太子が中国と対等な関係を築くために書いたと言われていますが、これで煬帝が怒ったのであれば、なぜ 3 回目の遣隋使が送られたのでしょうか。

ここで関係してくるのが、後に**白村江（はくすきのえ）の戦い**で関係してくる**高句麗（こうくり）**です。隋と高句麗は隣り合った国で、この時代は大規模な争いがあったため、**煬帝としても余計な敵を増やしたくない、むしろ高句麗を挟み込める位置にある日本は味方にしておくほうが得**だと考えて、遣隋使を受け入れたと考えられています。

なお日本書紀によると、「天皇」という文字は、この 3 回目以降の国書で「東天皇敬白西皇帝」（東の天皇が敬う西の皇帝へ）として使われており、「あくまで『皇帝』は中国だけのものとして尊重していますよ」という意味で用いたのではないかと言われています。その後、隋は内乱により滅びて唐に代わりますが、「日本」という国は中国の領土や主従関係のある国の一つではなく、一国家として扱われるようになっていきます。今も存続している**「天皇」という言葉には、他の国の属国にはならない、という意思が表れている**とも取れますね。

蘇我入鹿と中臣鎌足は同窓生だった !?

受験参考書では、「遣隋使＝小野妹子」の印象がかなり強いですが、**遣隋使は小野妹子だけではありません**。日本から小野妹子以外の者も、留学生として連れて行き、隋で学んで帰ってきて、日本で先生をしています。その隋から帰ってきた先生に習っていた生徒の中に、乙巳（いっし）の変の主役となる**蘇我入鹿**と**中臣鎌足**がいました。そう、この 2 人は**同じ教室で勉強した間柄**だったんですね。この時に 2 人を教えていた先生は、2 人が突出して優秀だったと話し

中大兄皇子と中臣鎌足

ていたそうです。

なお、この頃から２人は対立関係だったようですが、蘇我氏が全盛期を迎えたこの頃に、入鹿は自分が天皇になったかのように傍若無人に振る舞い、挙句の果てに聖徳太子の子である山背大兄王を殺害してしまいました。これを見た中臣鎌足は、このままでは天皇の存続が危ういとして、**中大兄皇子**に進言して、蘇我入鹿を殺害します。これが大化の改新のスタートとなり、後に中大兄皇子は**天智天皇**に、中臣鎌足は**藤原鎌足**となり、２人で力を合わせて政治改革を行っていきます。なお、藤原鎌足は冠位制度の最高位となる大織冠を授かった唯一の人物とも言われていますが、臨終に際して藤原姓と一緒に賜ったものなので、本人は藤原になったことすら知らないんですね。

●聖徳太子の政策により活躍した人物とその流れ

600 年　１回目の遣隋使派遣　⇒　隋に相手にされず

↓ もっとしっかりした国にしなければ！

603 年　冠位十二階を制定

↓ 小野妹子が昇進！

607 年　小野妹子が隋へ

蘇我入鹿と中臣鎌足も昇進

643 年　蘇我入鹿が聖徳太子の子（山背大兄王）を攻撃して自殺させる

645 年　中臣鎌足と中大兄皇子による大化の改新

↓

669 年　藤原鎌足に（藤原氏の祖）

仏教の役割

世界遺産となった世界最古の木造建築の役割

世界最古の木造建築として世界遺産にもなっている**法隆寺**は聖徳太子が建てたことで有名ですが、ただの趣味で建てたわけではありません。飛鳥時代からこのような建物が増えているように思うかもしれませんが、実は**この時代の一般的な住居はまだ竪穴住居**です。そう、縄文時代に出てきたあの家です。豪族クラスになると木造の建物になってきましたが、それでも平屋です。そんな中にドーンと大きな法隆寺、さらに高い**五重塔**が立ったら、人々はどう感じるでしょうか。現代に例えるなら、東京タワーやスカイツリーみたいなものですね。みんな高い所に登ってみたくなりますよね。それと同じで注目を集めたのです。もちろん現在の高層建築には権力的な意味合いは含まれていませんが、当時は**天皇の力を見せつける象徴**でもあったのです。

また、同時に建築技術の PR にもなりました。もし縄文時代に等しい竪穴住居だらけの光景を、すでに大規模な建築物が存在している隋から来た人が見たらどう思うでしょう。きっと「文明が遅れている国だ」と感じるでしょう。しかし法隆寺や五重塔があることにより、これだけのものを建てられるという**技術力のアピール**にもなったのです。

なお法隆寺に用いられた心柱という、揺れても倒れないようにする建築技術は、現在のスカイツリーにも応用されています。「どうせ中国から伝わったものでしょ？」という声が聞こえてきそうですが、実は中国でも朝鮮でも、法隆寺のような心柱の構造は発見されていません。似たようなものはあったと言われていますが、**ここまで大規模に建物の真ん中を貫いた心柱は、法隆寺の五**